

■公益社団法人 大阪自然環境保全協会

会長 夏原由博

大阪市北区天神橋 1-9-13 天神橋202号

TEL06-6242-8720(月・水・金) Email:yumeshima@nature.or.jp

■日本野鳥の会 大阪支部 支部長 納家 仁

大阪市天王寺区清水谷 6-16NEXT21

TEL06-6766-0500(火・金) Email:main@wbsjosaka.xsrv.jp

連絡先 携帯 090-1139-8901 (納家)

夢洲(大阪市此花区)の湿地で昨年に続き絶滅危惧Ⅱ類のセイタカシギが営巣

2025年大阪関西万博の開催予定地である夢洲において、2021年に続き、2022年6月5日、セイタカシギの営巣を確認しました。

本種は、生息環境の減少や悪化により個体数が減少しており、環境省編「日本の絶滅のおそれのある野生生物」- レッドデータブック - に、絶滅危惧Ⅱ類として掲載されている種です。

国内では、東京湾沿岸部や伊勢湾沿岸部のごく限られた場所が繁殖地として知られています。

大阪府においては、2006年に堺市の埋立地(堺第7-3区)で繁殖した記録がありますが、定着はせずに、現在は春と秋にため池や河口、埋立地等で少数が飛来する程度の貴重な水鳥です。

夢洲の湿地では、2021年に複数つがいが初めて繁殖し、本年6月5日、私どもの調査により、抱卵中の1つがいが確認できました。

セイタカシギの営巣している湿地の近くでは、現在、大阪港湾局における地盤整備工事が進められており、セイタカシギの繁殖への悪影響が懸念されています。

そこで6月9日、大阪市長(担当窓口:大阪港湾局及び大阪市環境局)に対し工事等の影響で繁殖が阻害されることのないように下記のとおり要望を行ないました。

■ 要望内容(概要)

セイタカシギの繁殖期間中(抱卵期間6月下旬まで、育雛期間7月下旬まで)の配慮事項

- 1 セイタカシギの繁殖が確認された湿地周辺の工事の一時中止
- 2 同湿地周辺への工事関係者の立入り禁止措置の徹底
- 3 繁殖状況のモニタリング調査の実施と調査結果の情報共有

(参 考)

1 営巣確認までの経緯

・2022年5月22日 セイタカシギ1つがい(2羽)を確認

繁殖行動(地面への胸を押し付ける行動、地上の小さな枝や石をくちばしでくわえては捨てるなど)を観察

・同5月29日 セイタカシギ9羽を確認。うち3つがいが繁殖行動(1つがいは交尾も)

・同6月5日 湿地のヨシ原近くの地上の巣で抱卵中の個体を確認。観察中、雌雄の抱卵交代あり。

2 その他の水鳥の繁殖状況

夢洲では、絶滅危惧Ⅱ類のシロチドリ繁殖行動も確認されています。また、2021年には同地で営巣していたコアジサシは、本年は埋立地内の水たまりに水浴びなどのために100羽前後の個体が飛来していますが、現在のところ当地では営巣が確認されていません。

(参考資料)



写真1 営巣地遠景



写真2 抱卵中のセイタカシギ 2022. 6. 5 午後



写真3 繁殖行動
手前のオスが地面に胸をおしつける
2022. 5. 22 午後



写真4 オスの飛翔 2022. 5. 22 午後

夢洲(2区)湿地 撮影 日本野鳥の会大阪支部

1 改訂レッドリスト 付属説明資料 平成 22 年3月 環境省自然環境局野生生物課 から抜粋

チドリ目 セイタカシギ科

VU(絶滅危惧II類)

セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus*(Linnaeus, 1758)

全長 37cm。脚がきわめて長く、赤色をしていて目立つ。1960 年頃まではごく稀な種であったが、その後の渡来記録は増え、越冬も記録された。1978 年には千葉県で巣卵が発見され、以降は東京湾沿岸地域では繁殖している。現在では北海道から沖縄県まで全国から渡来記録があり、渡来記録も個体数も増加傾向にある。場所によっては 数十羽で越冬しているのを見ることもある。海岸の干潟、湖沼畔、湿地、水田などに生息している。

執筆者:柳澤紀夫(日本鳥類保護連盟)

2 日本動物大百科 3 鳥類 I (1996 年 平凡社) から抜粋

セイタカシギ 学名 *Himantopus himantopus* 背高嶋 black-winged stilt

分布 東京湾岸ぞいの地域を中心に日本には 100 羽前後が生息。世界の温帯、熱帯に広く分布。

サイズ 全長約 32cm 翼長 21~24cm 体重 160~210g

特徴 体の大きさはハトくらいだが、あしが長くずっとスマート、背中と翼はオスが黒色、メスは褐色で、その他の部分は白色、頭部と頸部は白色のものが多いが、オスでは黒色、メスでは褐色の羽毛がいろいろの程度に生える個体もある。尾羽はやや褐色をおびた白色、虹彩色は赤色。くちばしは黒色で、足は赤色

生態 浅い湖沼、干潟のある河口、海岸などに生息し、らん藻類やゴカイ、昆虫、甲殻類、小型の魚などを食べる。一腹卵数 4、雌雄で抱卵。機能上 13 種類の声区分されるが、敵対行動に関連する声は特に大きい。

育雛期 産卵後 22~23 日でふ化するが、ふ化率は低い。ヒナはふ化後、すぐに巣を出て、水面や泥上の微小な餌を独力でついで食べて食べる。

両親はふ化後 2 週目までは頻りに抱雛(ほうすう)をするが給餌は行なわない。ヒナは育雛なわばり内を自由に歩きまわる。両親のほうは絶えずヒナたちの所在を確認していて、外敵の接近に対して親鳥が激しく警戒声を発すると、ヒナはその場にうずくまって外敵をやりすごす。

セイタカシギでは育雛の途中で、メス親の半数が育雛なわばりにオスとヒナを残して姿を消してしまう。このメス親による家族の遺棄は平均するとヒナのふ化後 21 日目に起こる。ヒナの防衛や抱雛など、残った親の育雛の負担が増大するが、残された親が子育てに失敗することはない。ヒナはふ化後およそ 4 週間で飛べるようになる。その後飛翔力が十分そなわると、家族ごとに繁殖地を立ち去っていく。

(北川珠樹)